

土左日記論(上)

大橋清秀

土左日記はいわゆる日記文学、わたくしのいう日記物語の最初の作品と考えられる。

まずはじめに、土左日記における記事を整理してみると次のごとくである。(本文は、鈴木知太郎博士校注、日本古典文学大系、岩波書店昭和三年二月刊による。なお、底本は故大島雅太郎氏旧蔵青鉛書屋本(藤原為)家自筆本系統)である。

年月日	歌順番号	作者	他書との関係	古典大系行数(含)	備考
承平四年十二月廿一日				7	含序
廿二日				3	
廿三日				5	
廿四日				3	

土左日記論(上)

年月日	歌順番号	作者	他書との関係	古典大系行数(含)	備考
承平五年一月元日				7	
廿八日				3	
廿七日	3	あるひと	和歌体十種の今昔卷第二十四の第四十三貫之	23	「また、あるときには」
廿六日	2	あるじのかみ	六帖第三海貫之	10	
廿五日	1	さぎのかみ		2	
廿四日	6	ゆくひと		2	
廿三日	5	かのひと		1	
廿二日	4	か		7	
廿一日					
廿日					
十九日					
十八日					
十七日					
十六日					
十五日					
十四日					
十三日					
十二日					
十一日					
十日					
九日					
八日					
七日					
六日					
五日					
四日					
三日					
二日					
一日					

一

十三日	十二日	十一日	十日		九日	八日	七日	六日	五日	四日
15		14 13		2 唄船 1 唄船 12	11	10	9 8 7			
		ひと をんなわらは		ふなびと		あるひと	このわらは このひと			
					六帖 第三 巻第十九 貫之					
8	2	16	1	29	7	27	1	2	3	
「うみをみ やればい」				類歌 六帖 貫之 第四巻 一本たぎ みね集 第一	「このうた をひとりご とにしてや みね。」		「うたあり。 そのうた。」			

廿三日	廿二日	廿一日	廿日	十九日	十八日	十七日	十六日	十五日	十四日
	27 26	25	3 唄船	24 23	22 21 20	19 18	17	16	
	あるひと このわらは	ひと ふなぎみなる		なまろのぬ しあるひと	あるひと ふねのをさし けるおきな	あるひと あるひと	あるひと	めのわらは	
			六帖 第一 雑の 月巻 第十九 巻 貫之		六帖 第三 磯 貫之			六帖 第三 浪	
2	8	16	20	1	15	11	5	5	5
								六帖 作者 名なし	

三月	二月	二月一日	卅日		廿九日	廿八日	廿七日		廿六日	廿五日	廿四日
37	36 35	あるひと ふなぎみ		34 33 32	あるをむな あるひと		31 30	あるをんな あるひと	29 28	あるめのわら は	
					むかし、とぎ といひけると ころにすみけ るをんな				め あはちのたう	六帖之第四 新千載之卷第八 鷗旅貫之第八	
4	1	13	8	14	六帖之第一 貫之子日	1	7	12			2 1
うけてよめる 「これにつ うた」											

		九日	八日	七日	六日		五日	四日	
	51 50 49	あるひと るひと いま、けふあ		48 47	46	45 44 43 42 41	40 39 38		
		故ありはらの 将なりひらの 中		者 ふなぎみの病	あはじのしま のおほいご	あるわらは あるひと むかしへびと のはは あるひと	あるをんな あるひと	ふねなるひと あるひと	
					六帖之第三 貫之	六帖之第三 貫之 草帖 貫第六 わす	六帖之第三 貫之 鴨	六帖之第三 貫之 貝 かた	
	22		5	12	8	35	13		
				まかに「ひと かことこのあ ねば、とい まひとつい			「これかれ、 くるしけれ ばよめるう た」	一 句のみ同 六帖第六 貫之集 第四	

一二月刊所収、および「古今集仮名序と漢文訓読」東京大・遠藤嘉基博士が
学養学部人文科学科紀要 第七輯 昭和三〇年七月刊）・「貴之の『文体と表現意識』——土左日記の文章
指摘しておられるように」（「貴之の『文体と表現意識』——土左日記の文章
部」昭和三二）、「きのふのことし。」（二月六日）とあるのは漢文
訓読語と考えられる。

次に、二行の記事は七箇所あり、勿論これらにも和歌が入つていない。

（承平十二月）廿五日。かみのたちより、よびにふみもてきたなり。
よばれていたりて、ひひとひ、よひとよ、とかくあそぶやうにてあ
けにけり。

廿九日。おほみなとにとまれり。くすしふりはへて、とうそ、白散、
さけくはへてもてきたり。こころざしあるにいたり。

（承平一月）三日。おなじところなり。もしかぜなみの、「しはし。」
とをしむこころやあらん、こころもとなし。

五日。かぜなみやまねば、なほおなじところにある。ひとへ、たえず
とぶらひにく。

十二日。あめふらず。ふんとき、これもちがふねのおくれたりし、な
らしづよりむろつにぎぬ。

廿三日。ひてりてくもりぬ。このわたり、かいぞくのおそりありとい
へば、かみほとけをいのる。

廿五日。かちとりらの、「きたかぜあし。」といへば、ふねいださず。
かいぞくおひくといふこと、たえずきこゆ。

この中にみえている天候についての記載は、「かぜなみやまね

ば」（一月五日）、「あめふらず。」（一月十二日）、「ひてりてく
もりぬ。」（一月廿三日）など三例であるが、これらの中にも、
「こころざしあるにいたり。」という漢文訓読語がみえている。
次に、三行の記事は四箇所あり、これらにも和歌は入つてい
ないのである。

（承平十二月）廿二日に、いづみのくにまでと、たひらかに願たつ。
ふちはらのときざね、ふなぢなれど、むまのはなむけす。かみなか
しも、ゑひあきて、いとあやしく、しほうみのほとりにて、あざれ
あへり。

廿四日。講師、むまのはなむけしにいでませり。ありとあるかみしも、
わらはまでゑひしれて、一文字をだにしらぬものしが、あしは十文
字にふみてぞあそぶ。

廿八日。うらどよりこぎいでて、おほみなとをおふ。このあひだに、
はやくのかみのこ、やまぐちのちみね、さけ、よきものどももてき
て、ふねにいれたり。ゆくゆくのみくふ。

（承平一月）四日。かぜふけば、えいでたゝす。まさつら、さけ、よ
きものたてまつれり。このかうやうにももてくるひとに、なほし
もえあらで、いさゝけわざせさす。ものもなし。にぎはしきやう
なれど、まぐるこゝちす。

この中にみえている天候についての記載は、「かぜふけば」（一
月四日）という一例のみであるが、以上土左日記における一行・
二行・三行の記事計二十二を通過してみると、七例の名詞(数

詞を含む)が漢字で記されているのである。そこで、これらの語が他の諸本においてどのように表記されているかをみてみると、

- 1 「願」(十二月廿二日)は、附・版が「ねかひ」。他はすべて「願」。
- 2 「講師」(十二月廿四日)は、条・類・宮・衛・定・寿(彰)・版が「講師」。相・附は「新司」。寿(刈・浅・池)は「好土」。
- 3 「一文字」(十二月廿四日)は、諸本すべて「一文字」。
- 4 「十文字」(十二月廿四日)は、相が「十もし」。他はすべて「十文字」。
- 5 「白散」(十二月廿九日)は、諸本すべて「白散」。
- 6 「講師」(二月二日)は、条・類・宮・衛・定・寿(刈・池・彰)・版が「講師」。相は「かうし」。
- 7 「京」(二月十四日)は、諸本すべて「京」。

となつていて、主要な写本にはすべて漢字で記されているのである。(この調査は、中村(河野)多麻博士著「定本土左日記 異本研究並に校註」(岩波書店 昭和一〇年五月刊、および池田亀鑑博士著「古典的批判的処置に関する研究 第三部 岩波書店 昭和一六年二月刊)によつた。なお、諸本の略号は次のとおりである。条―三条西家本。類―群書類従本。宮―宮内庁書陵部蔵本。衛―近衛家蔵本。定―定家自筆本。版―版本。寿―妙寿院本。刈―刈谷図書蔵本。浅―浅野図書蔵本。彰―彰考館文庫蔵本。池―池田亀鑑博士蔵片仮名本。相―池田亀鑑博士蔵伝為相転写本。附註―附註の本文。)

以上のように、

- 一 真名日記の記事をかな文にしたような表現のみられること。
 - 二 漢文訓読語のみられること。
 - 三 「講師」などの語が、主要な写本すべてに漢字で記されていること。
- などから、旅の真名日記が素材になつていることが明らかである。

るかと思えるのである。中田祝夫博士も新註国文学叢書土佐日記(講談社 昭和二)の補説において、「日記は毎日々々その日の事象を記録したものが主であるわけであるが、中にはそれを材料として、後日になつて文学的に書き改めた場合も多い。土佐日記などは多分その一つであらう。」(同書)とされており、三谷栄一博士も、「恐らくこの日記の原典となつたメモが『具注曆』のようなものに書き留められていた漢文日記であつたかと思ふ。」(角川文庫 角川書店)としておられる。

二

土左日記の五十五日間の記事のうち、和歌の含まれていないものが二十九日分に及び半数以上を占めている。しかも、これらの記事はすべて十行以内であつて、その半数以上の十八日分がすでに記したように一行・二行の記事なのである。

そこで、和歌の含まれている二十六日分の記事について考察したい。まずはじめに、五十八首の和歌のすぐ後の文をみてみると(船唄をのぞく)、

- 一 和歌についての評言や話の書かれているもの 二一例
- 二 和歌についての評言や話の書かれていないもの 三五例

に大別することができる。以上に属さないものは会話中に見えている二例(歌順番号 25・49〔業平〕)ということになるのである。

そして、一を、

(一) 和歌についての評言のあるもの 一四例(7・9・12・13・16・26・32・36・39・44・45・47・48)

(二) 和歌についての話のあるもの 七例(2・8・23〔仲麻呂〕・46・52・56・58)

二を

(1) 次の和歌の前の地の文につづくもの 三例(1・5・38)

(2) 次の記事につづくもの 八例(4・6・15・28・29・42・51・57)

(3) 和歌で終つていて、次につづかないもの 三例(10・14・34)

(4) 和歌のすぐ後の地の文のないもの 二一例

に、わけることができ、(4)をまた、

(1) 和歌をうけて次の記事につづくもの 九例(11・18・19・21・22・33・37・41・43)

(2) 和歌のすぐ後につづく地の文がなく、改めて地の文が書きはじめられていもの 一二例(3・17・24・27・30・31・35・40・50・53・54・55)

にわけることができるかと思う。

ここで、和歌のすぐ後の地の文に、和歌についての評言や話がみえている二十一例について考えてみたい。これらの土左日記に収められている和歌のすぐ後の地の文は、和歌がなければ書かれなかつたと考えられるものが、その大部分を占めているかと考える。そして、これは土左日記の作者である紀貫之の、土左日記における和歌に対するなみなみならぬ関心を立証しているものではないであろうか。

そしてまた、和歌のすぐ後の地の文に、その和歌についての

話が見られることは、和歌によつて土左日記の和歌の後の地の文が展開していることになり、前に記した、

(1) 次の和歌の前の地の文につづくもの 三例

(2) 次の記事につづくもの 八例

も、和歌が書かれていることによつて、土左日記の記事が展開して行つているのである。

次に、和歌のすぐ後の地の文のないもの(4)九例)においても、和歌をうけて次の記事につづいているのであつて、これらによつて土左日記における和歌の存在意義が明らかになつたかと考える。これについては、まだ拝見できずにいるが、渋谷孝氏もその論考『土左日記』における和歌——意義と機能——

(文芸研究 第二九輯 昭和三年七月刊)において考察をすすめておられるようである。そして、この事實は偶然の結果ではなくて、土左日記の作者の意図したものの結果であり、土左日記の成立に大きなかわりをもつものであると考える。すなわち、土左日記は紀貫之が承平五年二月十六日に帰京してから後に、前に述べた旅の真名日記とともに、旅中の和歌の手控えのようなものを素材として書かれたのではないかと考えるのである。

三

このことをさらに明らかにするために、土左日記に収められている和歌のすぐ前の地の文をみてみると、次のとおりである。

(1) …のよめりける 四例(1・2・6・10)

- (2) …よめりけるうた 一例(23)
- 二(1) …のよめる 九例(14・20・21・27・28・31・38・44・51)
- (2) …のまたよめる 一例(19)
- (3) …のよめりけるうた 二例(22・39)
- (4) …のよめるうた 一二例(12・18・24・29・30・33・35・40・42・43・45・54)
- (5) よめるうた 六例(8・17・34・37・41・53)
- (6) …なん、このうたをよめる 一例(13)
- 三(1) …のいへる 二例(16・55)
- (2) いへるうた 一例(9)
- (3) …とて、このうたにいへる 一例(36)
- (4) かくぞいへる 一例(46)
- 四(1) …のかきていだせるうた 二例(3・32)
- (2) …にて、になひいだせるうた 一例(5)
- 五(1) そのうた 二例(7・26)
- (2) そのうたは 一例(47)
- 六(1) …といへりけるうた 一例(57)
- 七(1) …よめり 一例(56)
- (2) …ところになれるうたよめり 一例(50)
- 八 以上のいづれにも属さないもの 八例(4・11・15・25・48・49・52・58)

次に、古今和歌集所収の貫之の歌百二首(38を含む)のうち、1101・1103・1111の三首をのぞいた九十九首の詞書の末尾をみると次のとおりである。(本文は、佐伯梅友博士校注 日本古典文学大系 古今和歌集 岩波書店 昭和三年三月)

刊(よ)

- 一(1) …よめる 二例(2・838)
 - (2) …をよめる 一〇例(9・45・58・124・128・280・331・336・881・931)
 - (3) …をみてよめる 八例(49・79・256・262・276・299・851・882)
 - (4) …をききてよめる 三例(160・162・849)
 - (5) …にてよめる 六例(39・260・312・371・415・842)
 - (6) …てよめる 六例(42・87・170・311・439・918)
 - (7) …とてよめる 三例(94・323・384)
 - (8) …によめる 五例(117・297・404・880・916)
 - (9) …ばよめる 二例(83・834)
 - 二(1) …をよみける 一例(82)
 - (2) …によみける 一例(381)
 - (3) …とてよみける 一例(390)
 - 三(1) …のそのながうた 一例(1002)
 - 四 以上のいづれにも属さないもの 二八例
 - 五 詞書なし 二二例
- そこで、土左日記に収められている和歌のすぐ前の地の文と、古今和歌集に収められている貫之の歌の詞書の末尾を比較検討してみると、まず、土左日記にみえている「…のよめる」という「助詞のついてるものは、古今和歌集においては、「…の哥合のうた」(三例)・「…のそのながうた」(一例)がみられるのみである。しかし、土左日記において、「…このうたや

「によめる」(二例)とあるように「に」助詞のついているものは、古今和歌集においては、「:によめる」(五例)というように同じ表現のものがある。次に、土左日記にみえている「:のよめりける」(四例)というような形のもは、古今和歌集にはないのである。

そこで、なぜ、古今和歌集の詞書に、「:のよめる」というように「の」助詞の用いられているのがみられないのかというと、土左日記の「:のよめる」の「の」助詞のすぐ前には、「ひと」とか「あるひと」というように和歌の作者が記されているのであつて、別に作者名のあげられている古今和歌集の詞書には、その必要がなかつたからである。

そして、古今和歌集の詞書には、「:をよめる」(二〇例)・「:をみてよめる」(八例)・「:をききてよめる」(三例)・「:にてよめる」(六例)・「:てよめる」(六例)・「:とてよめる」(三例)・「:によめる」(五例)・「:ばよめる」(二例)というようにさまざまな表現がみられるのであるが、これらの表現が土左日記の和歌のすぐ前にみられないのは、古今和歌集の詞書に記されているこれらの事柄は、土左日記の記事の中に書かれているからなのである。

ここで、土左日記の記事をみてみたい。

廿六日。なほかみのたちにて、あるじしのゝしりて、郎等までものかつげたり。からうた、こゑあけていひけり。やまとうた、あるじ

も、まらうども、ことひともいひあへりけり。からうたは、これにえかゝず。やまとうた、あるじのかみのよめりける

1 みやこいできみにあはんとこしものをこしかひもなくわかれぬるかな

となんありければ、かへるさきのかみのよめりける、

2 しらたへのなみちをとほくゆきかひてわれににべきはたれならなくに

この記事の中には、「かみのたちにて」「あるじしのゝしりて」「あるじのかみの」「となんありければ」「さきのかみの」などと記されていて、古今和歌集の詞書に記されている、いつ、どこで、だれによつて、どのような事情で歌がよまれたのかというようなことが書かれているのである。今、紙面の都合で一つの例しか示すことができないが、他の場合もほぼ同様と考えるとよいであろう。

次に、土左日記に収められている和歌と、地の文の長さとの関係を調べてみると、前に示した表によつても明らかのように、和歌の記されている時の記事は長いのである。すなわち、十行以上の記事には、すべて和歌がみられるのである。これらは和歌を中心にして、どのようなことがあつたかが記されているのであつて、換言すれば、どのような事情で、だれによつて歌がよまれたかの説明を中心に記されているのである。このような土左日記中の和歌のみられる日の記事は、詞書の内容の発展し

たものともみられるのである。そして、和歌のある日の記事が、和歌のない日の記事に比較して長文である事実は、貫之の土左日記執筆の意図と表裏をなすものと考えられるのである。

わたくしは、土左日記の素材となつたものとして、

「旅の真名日記」

「旅中の和歌の手控えのようなもの」

の二つを想定し、土左日記がかな文で書かれた理由の一つとして、旅中の和歌を入れたかつたからではないかと考えている。これについては前にも触れたことがある（『日記物語』の発生）

平安文学研究 第二八輯 昭和三七年六月刊、および和泉式郎日記の研究 初音書房 昭和三六年一月刊所収）が、以上、考察したこと

によつて、旅中の和歌の手控えのようなものが、土左日記の素材になつていることが明らかではないかと考える。

もし、土左日記から和歌と、和歌とともに記されている和歌のよまれた事情についての記事がなかつたとすれば、土左日記はどのようなものになつていたのであろうか。これはあくまでも仮定であるが、前にあげた一・二・三行の記事のようなものになつていたのではないかと推測されるのである。

四

さて、土左日記に収められている五十八首の和歌のよみ手を見てみる、と作者の明らかなものは歌順番号23阿倍仲麻呂（古今卷第九）・49在原業平（古今卷第一）の二首のみである。そこで、

この二首をのぞいた五十六首について考えてゆくことにする。この五十六首の和歌のうち、土左日記の地の文によつて、明らかによみ手が貫之であると考えられるものは、2「さぎのかみ」・22「ふねのをさしけるおきな」・25「ふなぎみなるひと」・36「ふなぎみ」・38「ふねなるひと」・47「ふなぎみの病者」・48・57・58の九首である。

次に、土左日記の地の文に、よみ手がだれであるかが記されているものをあげてみると、

- 1 「あるじのかみ」 (新土佐守)
- 5 「かのひと」 (新土佐守の兄弟その他)
- 7 (女性)
- 8 「このひと」 (割籠を持たせて来た人)
- 9 「このわらは」 (ある人の子)
- 13 「をんなわらは」 (そこにいた女の子)
- 六帖 16 「めのわらは」 (女の子)
- 26 「このわらは」 (九歳ほどの男の子)
- 六帖 28 「あるめのわらは」 (女の子)
- 新千載 28 「あるめのわらは」 (女の子)
- 六帖 29 「あはぢのたうめ」 (淡路の老女)
- 30 「あるをんな」 (女)
- 六帖 32 「あるをんな」 (女)
- 34 「むかし、ときといひける」ところにすみけるをんな」 (昔、土佐といたところに住んでいたという女)
- 40 「あるをんな」 (女)
- 六帖 42 「あるわらは」 (童)

六帖44 「むかしへびとのはは」 (貫之の妻)

六帖46 「あはじのしまのおほいこ」 (淡路の老女)

52 「むかしのこのはは」 (貫之の妻)

の十八首である。

以上の二十七首に入らぬ二十九首の和歌のよみ手を、土左日記の地の文によつてみてみると、

和歌体十種・今昔・宇治拾遺 六帖

くひと」・10「あるひと」・11・12「ふなひと」・14「ひと」・15

17「あるひと」・18「あるひと」・19「あるひと」・20「あるひと」

と」・21「ひと」・24「あるひと」・27「あるひと」・31「あるひと」

と」・33「あるひと」・35「あるひと」・37・39「あるひと」・41

43「あるひと」・45「あるひと」・50「いま、けふあるひと」

51「あるひと」・53「あるひと」・54「あるひと」・55「あるひと」

と」・56「あるひと」ということになるのである。

そこで、土左日記所収の和歌のうち、他の書にもみえてい

るものを調べてみると、はじめにかかげた表にあるように重複し

ているものをのぞいて十六首に及んでいる。すなわち、

今昔物語 一首(3)

宇治拾遺物語 一首(3)

和歌体十種 一首(3)

古今和歌六帖 一四首(6・10・11・16・21・24・28・29・32・38

・39・42・44・46)

後撰和歌集 三首(6・10・24)

新千載和歌集 一首(28)

土左日記論(上)

続後撰和歌集 一首(51)

ということになる。このうち、和歌体十種(3)、古今和歌六帖(16)、

続後撰和歌集(51)よみ人しらず)の三首は、貫之の作とはされて

いないものである。他の十四首(重出を含まず)はすべて貫之

の作とされている。これらを整理してみると、次のとおりである。

歌順 番号	土左日記における歌のよ み手	他書にみえてい る歌の作者
3	あるひと	貫之(和歌体十種・今昔・宇 治拾遺) 第三
6	ゆくひと	貫之(六帖) 第三
10	あるひと	貫之(六帖) 第三・後撰
11		貫之(六帖) 第三
※16	めのわらは	(作者名なし)(六帖) 第三
21	ひと	貫之(六帖) 第三
24	あるひと	貫之(六帖) 第一・後撰
28	あるめのわらは	貫之(六帖) 第四・新千載
29	あはぢのたうめ	貫之(六帖) 第三
32	あるをむな	貫之(六帖) 第一
38	ふねなるひと	貫之(六帖) 第三
39	あるひと	貫之(六帖) 第四
42	あるわらは	貫之(六帖) 第三
44	むかしへびとのはは	貫之(六帖) 第六
46	あはじのしまのおほいこ	貫之(六帖) 第三
※51	あるひと	(よみ人しらず)(続後撰)

註 ※印は貫之以外の和歌とされているもの。

なお、以上の歌の外に、萩谷朴博士は日本古典全書土佐日記(朝日新聞社昭和二年五月刊)所収貫之全歌集の補遺において、「15「くももみな」の歌の頭註に、「古今六帖卷三」と記しておられるのであるが、わたたくしが調査したところではみあたらなかった。

土左日記所収の和歌で、古今和歌六帖にもみえているものは、鈴木知太郎博士が日本古典文学大系(岩波書店昭和三年二月刊)の解説において、「さらに古今六帖にはこの日記の歌十四首を載せているが、そのうち十三首は貫之作となつていて、六帖の成る頃には、土左日記の貫之作であることは、もはや世の常識となつていたものとも推定せられる。」(同書六)とされているように、十四首が正しいようである。また、小西甚一博士は、土佐日記評解(有精堂昭和二年二月刊)の解説において、樋口寛氏の論考「土佐日記に於ける貫之の立場」(古典文学の探求昭和十八年六月刊)によつて、十五首をあげておられるのであるが、そのうち37「ををよりて」の歌は、はじめにかかげた表にも示しておいたように、第一句「ををよりて」だけが同じで、第二句以下はちがつているので除外すると、十四首ということになるのである。

そして、他の書にみえている十六首の和歌のうち、16・51の二首以外はすべて貫之の歌となつているのである。しかも、他書に貫之の歌としていっている十四首のうち、3以外の十三首はすべて古今和歌六帖にみえているのである。

これによれば、土左日記にみえているこれら十四首の和歌は、紀貫之の歌ということになるのである。萩谷朴博士は日本古典

全書所収貫之全歌集の補遺において、23(仲麻呂)・49(業平)の二首をのぞく五十六首をかかげて、

1「みやこいでて」(日本古典全書の註記 別四二)

5「をしとおもふ」(同 別四三)

7「あさちふの」(同 別四四)

8「ゆくさきに」(同 別四五)

の四首以外の、五十二首を貫之の歌と見られるようである。そして、萩谷朴博士は、日本古典全書の解説において、「貫之が船中で書きつけたものと日記は、極めて和歌の記入の多いものであつた。即ち、通常の漢文体の日記ではありながら、それ自身が歌日記ともいふべきものであつたと思はれる。」(同書八頁)とされており、すでに諸先学によつて、漢文体の日記が土左日記の素材となつたのではないかと推定されているのであるが、すでに述べたように、わたたくしは、旅の真名日記と旅中の和歌の手控えのようなものを素材として、貫之が土左から帰京した承平五年二月十六日から一、二年のほどに書かれたのではないかと考えているのである。

そして、すでに諸先学が明らかにしておられるように、土左日記が、「をともすなる日記といふものを、をむなもしてみんとてするなり。」として書きはじめられておりながら、土左日記の筆者である女の立場で一貫して書かれておらず、主人公である貫之についての記述も不統一で、古今和歌六帖などによれば土左日記に、「あるめのわらは」(28)・「あはちのたうめ」

(29)・「あるをむな」(32)・「あるわらは」(42)・「むかしへび
とのほは」(44)・「あはじのしまのおほいご」(46)としてみ
えている歌は貫之の歌ということになつてゐるのである。
草がなによつて書かれたいわゆる日記文学の最初の作品と考
えられる土左日記に、このような事実の存在することは、いわ

ゆる日記文学が発生したその時すでに、このような性格が日記
文学に存在していたことになり、日記文学の発生と本質の問題
を究明する上に注目すべきことではないかと考えられるのであ
る。

(以下次号)